
君の相対 “ 生 ” 理論 —歪な約束と存在理由—

蛇の目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の相对“生”理論 ―歪な約束と存在理由―

【Nコード】

N6022U

【作者名】

蛇の目

【あらすじ】

家庭内トラブル、バイトのクビ、学力の低下・・・と学生にとっては劇的ショックを一気に受けた『瀧川 冬也』は自殺するつもりで屋上に駆け上がった。フェンスを越えて、後もう一步。そんな時突然、彼女はこういった。「君は妹の僕の為に、僕より先に死んではいけない。」・・・半場強引に約束させられた血筋も籍もない口上だけの兄妹。その歪んだ関係は妹『瀬戸内 冷夏』にとってかけがえのない存在だった――。

第一話 『俺に妹ができました』

【相対性理論】

アインシュタインが、自ら考えた相対性原理と光束不変の原理などに基づいて展開した理論。

空間と時間は別々のものではなく、互いに結びつけられて四次元の世界を構成する、また空間・時間は伸び縮みする、と説く。

【相対生理論】

冷夏が、自ら考えた人間相反性論とその心理論などに基づいて展開した理論。

自分と他者とは別々の存在ではなく、互いに結びつけられて生命の樹を構成する、また相反する関係は同一である、と説く。

君が笑うなら、僕は泣こう。

君が怒るなら、僕は悲しもう。

君が動くなら、僕は見守ろう。

君が好きなら、僕は離れよう。

「お前が好きなんだ！」

「・・・なら、ずっと『友達』でいようか。」

君が死ぬために生きるなら、
僕は生きるために死のうか。

そう、これはそんな相反する非日常。

歪んだ愛、哀だ。

♀ ↑ × ↓ ♂

俺は今どうしようもなく不思議な感覚だった。
隣にいるのは顔が少しばかり整った、染めたことのない綺麗な焦げ
茶色をした髪をポニーテールに束ねている少女。

少女と俺はつい先日まで他人だった。名前どころか姿さえ知らなかった。

それが今日、俺には必要な人物に変わった。

「お兄ちゃん。僕、あれ見たい。」

「あ？」

少女が指差したのは古ぼけた建物で、昔から立ってますという雰囲気を出している小さな書店だった。俺が「ああ、どうぞ。」と無造作に答えると、少女は小さく笑ってから頷いて、書店へ駆け出す。

なんとも不思議な少女だった。

何故、第一人称が高校生にもなつて『僕』なのか。

何故、俺を兄と呼び慕っているのかも。

書店に入ると外気と遮断された冷気が肌に触れた。

季節は夏。冷房がついているのは当たり前だが、この古ぼけた建物ではそれが当たり前ではない気がして、俺は一瞬立ち止まる。

いや、実際はもっと長かったのかもしれない。いつのまにかそれを見ていたらしい先に入っていた少女が隣に立っており、面白そうな物をみたような顔で立っていた。

「瀧川：ああ、やっとこつち向いた。」

お兄ちゃん、僕さつきから君を呼んでいるのだけれど？」

そう、俺は今日の昼休み、突然彼女——瀨戸内冷夏の兄になってしまった。

♀ ↑ × ↓ ♂

それは昼休み。俺が悶々と屋上で一人立っていたのが事の始まりだった。

両親が別居して生活が苦しい最中、ある日突然バイトをクビにされ、さらに成績がガクンと落ちて生きた心地がなかった。

——…俺、なんで生きてんだろ。

ふつと沸いた疑問符がずっと頭に残って、モヤモヤとしたストレスが俺をさらにマイナス思考にさせた。

つまり、まあ生きている必要がないと思ったわけだ。

そんな俺が屋上で悶々としていた理由は、どうやったら確実に自殺ができるかと考えていたからだ。

下手に飛び降りて、もし助かってしまっただけで生きていたら入院費がか

かつてしまつ。ただでさえ家族の苦しい家計がさらに苦しくなるのは嫌だった。

今から死ぬ人間が家計を考えるのはおかしいかもしれない。それでもその時俺はそんな事を一人悩んでいた。

そこへ彼女が来た。

俺は慌ててフェンス越しに少女を見つめたが、彼女は屋上に来て此方に視線をやるも、止めたり慌てたりをするでもなく俺の近くに来て、なんと弁当を開いた。

「ねえ。」

「お、おう……」

「これ食べて。」

フォークで刺されたのはタコさんウィンナーだった。高校生になってそんな弁当なのかと俺は内心つつこんだ。そして同時に言った。

「言つとくけどタコさんウィンナーで釣つても、俺は諦めるつもりないぞ。」

「諦める?。」

なにそれ。と言った様子の少女を見て、ぼかん俺は口を間抜けに開けた。

——…なんだコイツ。俺が今から自殺しますって感じの奴だって

見てわかるだろ？

しかし少女は興味なしと言った様子で問答無用と言わんばかりに、俺の口にウィンナーを突っ込んだ。

「うごっ」

「僕、ウィンナー食べられないんだよね。」

口の中のものを吐き出すわけには流石にいけないので、俺はそれを飲み込んだ。そして、時間差ではあるが当然の反応をした。

「…は？」

すると少女はもう一度、同じ事を言った。

「僕、ウィンナー食べられないんだよね。」

「じゃあ入れてくんなよ…。」

「でもね。」

その時、俺はようやく彼女が変だと思った理由に気づいた。

少女は夏なのにも関わらず、長袖を来ていたのだ。

彼女はその左の方の長袖を捲った。次に見えたのは美しい程白い肌——ではなく、包帯だった。

「刻むのは好きなんだよね。」

につこりと笑ってそんな事をいった。

俺は頭が真っ白になった。

「ちょ、おま何いつてるかわかって…?!」

「あ、見る?」

「いやだから…! うわああ包帯とくなくて…!」

少女は相変わらず俺の話を全く聞かずに包帯をといて見せようと要らない親切心——いや嫌がらせをしていた。

包帯の下から見えたのは痛々しい位の赤。飛行機雲みたいなまっすぐな線があった。

血は止まっているものの、幾重に切ったらしく肌が炎症を起こしているのもあって真っ赤だった。

いわゆる手首自傷行為、そして腕^{リストカット}自傷行為^{ワンドカット}。

「グロ…グロすぎるだろ…。」

「僕にとっては芸術だよお。」

クスクスとそんな事を言う。

とりあえずそのままにするわけにも行かないので、俺はフェンスを越えてから包帯を巻き直してやる。そして当たり前だろうがこう言った。

「そついうの、やめろよ。痛いだろ?」

すると少女は突然笑うのをやめてずいっと顔を近づけた。

びくつとした。そりゃそうだろ？いきなり近づけられたら誰だってビビる。

すると少女はこう言った。

「嫌？ねえ、ならさ、じゃあ取り引きしようよ。」

「は？」

「僕のお兄ちゃんになって？そうしたら僕は芸術を諦めよう。」

「はい？だから俺は…」

すると少女は今までののが嘘だったように真顔で言った。

「自殺志願者でしょ？さっきの提案も嫌か。結構我が儘な兄貴だな。仕方ない、ならこうしようか。」

我が儘で悪かったな、と内心呟いている間に、彼女は弁当からミニトマトを選んだ。

真っ赤な球体が口に収まった後、しゃくしゃくと咀嚼音がやけに大きく響いて、ごくんと少女が飲み込んだ。

「…っん。君は妹の僕の為に、僕より先に死んではいけない。そのかわり僕は君の為、兄の為に芸術を諦めよう。」

わかったら名前を覚えてくれないか？

ああ、先に自己紹介しろというならしてあげよう。僕は冷夏というのさ、お兄ちゃん。

ほら、僕は名乗ったぞ。次は君の番だ。」

「た、瀧川冬也…。って、あ。」

こうして半場強引に取り引きが成され、俺は死ぬ権利を彼女に剥奪された。

♀ ↑ × ↓ ♂

「瀧川お兄ちゃんってどうなんだよ。」

「だって君が中々反応しないからだろう？ 瀧川 冬もお兄ちゃん。」
「今度はフルネームか！」

「しいー。駄目だよお兄ちゃん、ここ本屋さんだからね。」

クスクスと笑っている冷夏は憎たらしい程に可愛かった。

——…顔はな。

言い訳するようにそう内心付け足してから、冷夏がもつ本に目を向けた。

「なんだそれ？『相対性理論』？」

「そうだよお、ちょうど僕達みたいな事を言った科学の本。

あ、お兄ちゃんは文系だからわかんないか。」

「舐めるな！…と言いたいけど、すまん。わからんわ。」

冷夏はそれを購入するとさっさと書店を出ていき、俺は名残惜しうに冷房の効いた空間を出た。

見ればいつのまにか空はオレンジ色をしていた。

少女は俺の隣にまたいつのまにか歩調をあわせていて、ご機嫌に相対性理論の本を鞆にしまいながら歩いている。

「なあ。」

「ん？どうしたのお兄ちゃん。」

そして俺は一番気になった事を聞いてみる。

「なんでお前、お兄ちゃんって俺を呼ぶんだ？

俺以外にもいるだろ？」

すると冷夏はきょとんとしてから、当然といった様子で微笑んだ。

「僕は瀧川がよかったんだ。」

——あのー、意味不明なんですけど？

しかし彼女は鼻歌まで歌いはじめて進んでおり、仕方なく俺はそれ以上なにも聞けなくなった。

——そう、これは一瞬にすぎたない。そしてこれが始まりに過ぎないんだって事を、俺は身をもって知ることになる。

しかしこの時、俺は冷夏を何も知らなかった。

少女が何故兄を求めたのか。
少女が何故俺を選んだのか。

俺は知ろうとしなかった。

自分から聞くにはあまりに当たり前すぎて、そしてあまりに非日常だったからだ。

ともかく、こうして俺達の歪な関係が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022u/>

君の相対“生”理論 —歪な約束と存在理由—

2011年10月9日02時54分発行